

発達障がい児に対する余暇活動の実施

代 表 者：伊藤信寿(リハビリテーション学部)
連 携 機 関：伊藤陽香(NPO 法人むく 多機能型事業所むく)
大野実沙紀(NPO 法人むく 多機能型事業所むく)
田村萌弥(NPO 法人むく 多機能型事業所むく)
牧 春奈(NPO 法人むく 多機能型事業所むく)

1. はじめに

障がいのある子どもは、自ら余暇を自己選択して取り組むことが難しく、保護者の負担も大きい。余暇は、QOLの構成要素として中核指標の一つであることがSchlackら(2002)に示されている。しかし、近年増加している発達障害のある子どもや成人においては余暇の乏しさが多く報告されている。

浜松市においても例外ではなく、浜松市における発達障がい児への支援は、専門機関が少なく、特に児童期から青年期での支援方法は確立されておらず、その対応は緊急な課題である。実際に浜松市在中の発達障がい児の保護者は、幼少期においては支援が比較的に多くあるが、就学期以降は支援がなく、困っているということも多く訴えている。このように発達障害児あるいは、グレーゾーンの子どもの対する量と質における支援の不足により、孤独な保護者、関わりが薄い親子関係等の課題に対する取り組み、地域社会が子どもを取り巻く支援に関心や理解を深め、地域が協働しながら、支えていくことが必要と考える。

このような状況を踏まえ、今回の目的は、障害のある子どもに対し、様々な余暇活動を提供し、子ども一人一人のニーズに合い、継続可能な余暇活動を見つけることに繋がることを目的とする。

2. 方法

1) 対象

多機能型事業所むくを利用している小学生から高校生の発達障がい、あるいは支援を必要とする子ども。

2) 余暇活動の内容

革細工、陶芸、木工、手工芸、絵画、スポーツ、料理を提供

3) 余暇活動の実施

場所：多機能型事業所むく

活動日：平日の学校終了後に多機能型事業所むくを利用する日

活動参加：活動内容を提供し、子どもがやりたい活動を選択

4) 期間

2023年2月13日から2023年3月31日

5) アンケート調査

口頭による回答が可能な子どもに対して、活動に参加したアンケート調査を実施した。

3. 結果

1) 参加者

多機能型事業所むくの放課後等デイサービス事業に登録している32名であった。年齢等の内訳は表1のとおりである。

表1 参加者数

	小学生低学年	小学生高学年	中学生	高校生
特別支援学校	3名	4名	4名	8名
特別支援学級	6名	4名	0名	0名
通常級	0名	2名	0名	1名

2) 活動への参加人数（延べ数）

各活動に参加した人数は表2の通りである。複数参加あり。

表2 活動に参加した人数

	革細工	陶芸	木工	手工芸	絵画	スポーツ	料理
特別支援学校	10名	14名	2名	0名	2名	2名	14名
特別支援学級	5名	8名	1名	0名	1名	1名	10名
通常級	1名	1名	0名	0名	0名	1名	1名

革細工、陶芸、料理においては、年齢や知的レベル等に関係なく、多くの参加者がおり、継続的に参加していた。参加者の4名については強度行動障害と判定されているが、革細工や陶芸に参加し、活動中は笑顔もみられ穏やかな様子で行っていた。

3) アンケート結果

アンケートは、口頭で答えられる14名から回答を得た。質問内容は、①どの活動が楽しかったか、②またこのような活動をしたいか、③今後やってみたい活動はあるかの3つであった。アンケート結果は下記の通りである。

表3 アンケート結果

①どの活動が楽しかったか	料理10名、革細工5名、陶芸5名、木工2名
②またこのような活動をしたいか	したいと回答14名
③今後やってみたい活動はあるか	料理10名、サイクリング5名、乗馬3名、菜園3名

4. 考察・結論

Orsmondら(2004)は、自閉症スペクトラム症の10歳から21歳までの185名、22歳から47歳までの50名の母親に対し、本人の仲間関係、社会的、余暇的活動への参加に関する面接と質問紙調査を行い、全体のほぼ半数には同年代の活動をともにする互恵的・相補的な関係がなかったことを明らかにしている。また、津上ら(200)の調査によると家庭内での余暇の過ごし方として「母親と一緒にテレビやビデオを観て過ごすことが多い」こと、さらに家の外での主な過ごし方については保護者との「スーパー等への買い物」や「ドライブ」が多いことなどが報告されている。以上のことから、障害のある子どもたちは積極的に外で活動することが少なく、余暇を受動的に家族と過ごしていることが示唆されている。

また、4名の強度行動障害の生徒において、活動を通して穏やかに過ごすことができて

いた。人を叩く、嘔む、あるいは自分の頭を叩くというような行動は、問題行動という捉え方ではなく、何かに困っているサインであると捉えることが重要であると同時に、その子に合った活動を見出すことが重要である。子どもに合った活動を見出すための一つの手段として、その子の好きな感覚刺激は何かを考えることがある。今回提供した革細工の木槌で刻印を打つ、陶芸で粘土をこねる活動を通して、子どもの好きな固有受容覚刺激が得られたと考えられる。一人一人の子どもに合った余暇活動は、子どもの情緒面の安定にも効果があると考えられる。

今回の事業のように地域における余暇活動支援を実施することにより、多種多様な子どもや保護者のニーズに応える機会となり、より広範囲の年齢層の多くの発達障害の子どもたちと、その家族への支援が可能となる。特に本大学が位置する浜松市における就学後の発達障害児とその家族に対する支援は非常に手薄であるため、この地域連携事業が浜松市における発達支援の拠点になる可能性があると考えられる。さらに発達障がい児の余暇活動あるいは居場所の提供により、二次障害としての問題行動や不登校、ひきこもり、虐待のリスクが低くなることが期待できる。